信頼関係

大学に入学してすぐ、私はお寿司屋さんでアルバイトを始めた。洗い場で皿洗いをするのが私の仕事だった。

若い職人さんは親切で、まかないにお寿司を握ってくれたり、休憩時間に喫茶店に連れていってくれたりした。だが、私はこの仕事をそれほど楽しいとは思えなかった。

親方がロをきいてくれなかったのだ。

文字通り、店のトップであり、絶対的な権力を握る親方は、すべての職人のお手本であり、憧れだった。そんな親方は、皿洗いのバイトの私には一切、ロをきかなかった。親方が私に話しかけてきたのは、面接の際に、

「根気はあるほうですか？」

とたずねてきたその一言だけであり、入職してからは、こちらから挨拶しても黙って頷かれるだけだった。

早く辞めたいな。そんなことも脳裏をよぎったが、根気はあると面接で答えた以上、簡単に投げ出すわけにもいかない。時給はそれ

ほど高くなかったが、私はこのバイトを頑張って続けた。

バイトを始めて二年が経った頃だった。夜の営業が終わり、片付けをしだした時に、親方に呼び出された。そして、こう言われた。

「キミが入ってちょうど二年が経つ。これまでのアルバイトはみんな一ヶ月、ニヶ月で辞めていった。これほど長く続いたのはキミが初めてだ。感謝している」

継続は力なりというが、労働現場での信頼関係もまた、継続によって得られることがある。皿洗いを二年間続けてよかったと思った。

「キミがこの先、どんな仕事に就くか分からない。でも、せっかく寿司屋に入ったのだから、寿司の基本を教えてあげよう。まずはイワシのさばき方からだ」

厳しい親方が、優しい口調で包丁を持たせてくれたあの日を、私は忘れないだろう。